

CITATION:McGregor AH, Probyn K, Cro S, Doré CJ, Burton AK, Balagué F, Pincus T, Fairbank J. *Cochrane Database of Systematic Reviews* Cochrane Back Group, Issue 12. Art. No.: CD009644. DOI: 10.1002/14651858.CD009644.pub2
CRG名: Cochrane Back Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 1 March 2013
Clib issue No.;N/U: 2013 Issue 12; New

アブストラクト

背景: 腰部脊柱管狭窄症は背部痛の一般的な原因で、特に歩行時に臀部、大腿部、下肢の疼痛をも引き起こす可能性がある。いくつかの治療法があるが、その中では機能の回復および疼痛の軽減には手術が最適と考えられる。手術のアウトカムは理想的とはいえず、かなりの割合の患者では機能の回復が良好ではない。エビデンスに基づいた満足のいく術後ケアのアプローチが不明であることから、このレビューを実施するに至った。

目的: 腰部脊柱管狭窄症の初回手術後の積極的なリハビリテーションプログラムが機能アウトカムに影響を及ぼすかどうか、また、このようなプログラムが「通常の術後ケア」より優れているかどうかを明らかにすること。

検索戦略: 以下のデータベースを創刊号から2013年3月まで検索した: CENTRAL (コクラン・ライブラリ、最新号)、Cochrane Back Review Group Trials Register、MEDLINE、EMBASE、CINAHL、PEDro。

選択基準: 腰部脊柱管狭窄症が確定し、(固定を伴う、または伴わない) 脊髄減圧術を初めて受けた成人(18歳以上)において、積極的なリハビリテーションと通常ケアを比較するランダム化比較試験(RCT)を検討した。

データ収集と分析: 2名のレビューアが個別に、事前に作成されたフォームを用いて、組み入れた試験からデータを抽出した。必要な場合は、もとの試験の著者に連絡し、追加の未発表データを要請した。参加者のベースライン特性、介入、比較、追跡、アウトカム指標を記録し、臨床的な均質性の評価を可能にした。Cochrane Back Review Group (CBRG)が勧告した5つの質問を用いて臨床的関連性を独立的に評価し、CBRG基準を用いて試験内のリスクバイアスを判断した。

適切な場合は、個々の研究結果をメタアナリシスで統合した。連続的なアウトカムについては、すべての研究で同じ測定尺度が用いられた場合は平均差(MD)、異なる測定尺度が用いられた場合は標準化平均差(SMD)を算定した。報告されたアウトカムの平均および標準偏差により、アウトカムデータが非対称であることが示された場合は、比較対象となっているすべての研究のデータを対数変換し、対数尺度についてメタアナリシスを実施した。対数尺度について行った分析の結果を元の尺度に転換した。統計的異質性を示す顕著なエビデンスがない場合には、固定効果逆分散モデルを用いて治療効果を測定した。顕著な統計的異質性が見出された場合は、ランダム効果逆分散モデルを用いた。

一次アウトカム指標は、背部に特異的な機能尺度によって測定された機能状態であった。二次アウトカムには下肢痛、腰痛、全般的改善/全体的健康度があつた。アウトカムの統計的有意性および臨床関連性を検討した。各アウトカムに関するエビデンスの全体的な質は、5つの基準に基づくGRADEアプローチを用いて評価し、満たされた基準の数に基づいてエビデンスの質を高から極めて低に分類した。

主な結果: 検索では、1,726件の結果が生じ、全部で3件の研究(参加者373例)をレビューおよびメタアナリシスに組み入れた。すべての研究のバイアスリスクは低いと見られ、許容不可能な高い脱落率を伴う研究はなかった。また、一次アウトカムについて、許容できないほど不均衡な脱落率、治験実施計画書に対する許容できないほど低いアドヒアランス率またはノンアドヒアランス、明らかにバランスが取れていない重大なベースラインの差異

短期間(術後6ヵ月以内)のアウトカム

3件のRCT(N = 340)から得られた中等度の質のエビデンスは、機能状態[ログSMD -0.22、95%信頼区間(CI) -0.44 ~ 0.00、20%の平均パーセンテージ改善(標準化機能スコアの低下)、95% CI 0% ~ 36%に相当]および腰痛の報告[ログMD -0.18、95% CI -0.35 ~ -0.02、16%の平均パーセンテージ改善(VASスコアの低下)、95% CI 2% ~ 30%に相当]について、積極的なリハビリテーションが通常ケアよりも有効であることを示している。これとは対照的に、質の低いエビデンスは、下肢痛[ログMD -0.17、95% CI -0.52 ~ 0.19、16%の平均パーセンテージ改善(VASスコアの低下)、95% CI 21%の増悪 ~ 41%の改善に相当]について、リハビリテーションに通常ケア以上の有効性がないことを示している。2件のRCT(N = 238)から得られた質の低いエビデンスは、全体的健康度について、リハビリテーションに通常ケアを上回る利益はないことを示している(MD 1.30、95% CI -4.45 ~ 7.06)。

長期間のアウトカム(術後12ヵ月時)

3件のRCT(N = 373)から得られた中等度の質のエビデンスは、機能状態[ログSMD -0.26、95% CI -0.46 ~ 0.05、23%の平均パーセンテージ改善(標準化機能スコアの低下)、95% CI 5% ~ 37%に相当]、腰痛の報告[ログMD -0.20、95% CI -0.36 ~ -0.05、18%の平均パーセンテージ改善(VASスコアの低下)、95% CI 5% ~ 30%に相当]について、リハビリテーションが通常ケアよりも有効であることを示している。中等度の質のエビデンス(N = 373)では、下肢痛[ログMD -0.24、95% CI -0.47 ~ -0.01、21%の平均パーセンテージ改善(VASスコアの低下)、95% CI 1% ~ 37%に相当]についても示されている。これに対し、2試験(N = 273)から得られた質の低いエビデンスは、全体的な健康の改善について、リハビリテーションに通常ケアを上回る利益はないことを示す(MD -0.48、95% CI -6.41 ~ 5.4)。

組み入れ対象となった論文の中に、関連性のある有害事象を報告したものはなかった。

レビューアの結論: エビデンスは、長期間および短期間の(背部に関連した)機能状態の改善において、積極的なリハビリテーションが通常ケアよりも有効であることを示唆している。類似の結果は、腰痛の短期的な改善、腰痛および下肢痛双方の長期的な改善を含む二次アウトカムでも確認されたが、全体的健康度の改善について観察された影響は限定的であった。これらの効果の臨床的関連性は、中程度か少なかった。今回の評価は特定された関連試験の数が少ないために限界があり、さらなる研究が必要である。

平易な要約(Plain language summary)

運動によって腰部脊柱管狭窄症の手術後の結果を改善できるか

脊柱管狭窄症は、脊髄神経が通る管が狭くなり、神経を圧迫する場合に生じ、背部または下肢の疼痛を引き起こします。高齢者でより頻繁に起きる傾向があります。手術は減圧に役立つ可能性があり、ほとんどの患者は下肢痛の改善を認めますが、必ずしも背部痛に有用とは限らず、人々は日常業務の遂行に依然として問題を抱えています。本レビューは、手術後の指導を受けながらの運動プログラム(リハビリテーションプログラム)が日常生活を送る患者にとって、活動を続けるための通常のアドバイスよりも役立つかどうかを調べる目的で行いました。

この分野の研究はこれまでにほとんど行われておらず、組み入れに適切な試験が3件のみであることがわかりました。合計で300例を超える参加者が組み入れられました。各研究では術後6~12週間後から週に1回または2回提供される30~90分間のリハビリテーションプログラムが行われました。

背部減圧術を受けた人のために特別に考案された運動プログラムは背部痛の軽減に役立ち、日常業務の遂行能力を改善できることが確認されました。これは短期間(手術から6ヵ月以内)および長期間(12ヵ月時)のいずれにも当てはまりました。組み入れに適切な研究が3件のみであったため、今後の研究でこれらの結果が変わらないと確実に言うことはできません。

(監訳 南郷 栄秀)

翻訳公開日: 2015年3月3日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。